

17-15 授業解題

島名：グローバル・イシュー

教科（領域）：国語

単元（教材）：文学の中の戦争

対象：中学校2年3組

授業者：松本 圭祐

1. グローバル・スタディーズの観点からみた本授業の「強み」

この単元全体としては「文学で戦争を表現する意味・可能性について自分の考えを持つ」ことがねらいである。授業公開がなされた本時の目標は「戦争が文学を通してどのように表現されているかを考え、その表現の工夫について自分の考えを持つ」とされている。具体的には、小学校、中学校の教科書に取り上げられている戦争教材を再度読み直し、具体的に着目しながら戦争が文学の中でどのように描かれているかをグループでディスカッションしながら明らかにしていった。

戦争はグローバル化の必然の結果であるが、グローバル化の負の側面である。戦争を実際に体験した世代が日本には少なくなっている中で、疑似体験や登場人物への共感を通して戦争の悲惨さを理解することは、グローバル化の多様な側面を検討するグローバル・スタディーズにとって、貴重な学びである。平和学習は知識だけでは成立せず、共感的理解を伴う必要があるが、その意味で、文学作品を読むことは戦争の被害者への共感を育むのに教科的であると考えられる。

また、本授業では、国語科の学習として、戦争の実態を文学を通して学ぶという課題設定はせず、文学が疑似体験や共感を可能にするための表現の工夫について考えるという視点からそれぞれの文作品に光をあてていた。多くの文化に共通すると言ってよい文学という表現形態について、その可能性を生徒たちが探求するという学習を行った点は評価できる。

2. グローバル・スタディーズのカリキュラム開発に向けて

事後検討会では、戦争以外のグローバル・イシュー、例えば環境問題についても同様に文学教材から考えることで共感的理解を育成するような授業が展開できるのではないかが議論された。国語科の新たな可能性にもつながり、他教科との連携にもつながりうるものとして、期待したい。